

民俗芸能のいま

—活かす、つなぐ、広げる—



市内に大きな爪痕を残した大震災から6年。被災からいち早く復活を成し遂げ、活躍の場を大きく広げている大船渡の民俗芸能が、今、各地で脚光を浴びています。地域の人々が地域の人々のために演じ、守り、受け継いできた民俗芸能。他の地域の人々をもひきつけるその魅力と、郷土の宝を守り伝える担い手たちの挑戦に迫ります。

▽問い合わせ先 生涯学習課文化財係(☎内線292)

(6)

※「郷土芸能」と「民俗芸能」は同一のものを指しますが、本記事では「民俗芸能」に表記を統一しています。

地域の再生を後押し

被災から 早期に復活

市内では、多くの民俗芸能が伝承され、地域の祭典や年中行事などで演じられていきます。その目的は、人生の節目を祝う、亡くなった人を弔う、悪運を追い払い、豊漁・豊作を引き寄せるなどさまざまですが、暮らして密着して引き継がれてきた民俗芸能は、私たちが思い描くふるさとの情景を形づくっています。

平成23年に発生した東日本大震災では、担い手が亡くなったたり、練習場所や装束・道具が流されたりしたため、沿岸地域の民俗芸能の多くが存続の危機にさらされました。こうした中、震災直後から、市内各地で関係者が自らの生活再建と並行して、民俗芸能の復旧に奔走しました。「変わり果てたわがまちの情景を取り戻す。それには、民俗芸能が欠かせない。」そんな

な熱い思いが全国の支援団体に届き、助成によって装束や道具が次々と修復され、新調されました。

このようにして、市内各地で早期に活動を再開した民俗芸能は、人々を癒やし、勇気づけ、地域の復興に向け精神的支えとなりました。

悲しみに寄り添う

崎浜念佛剣舞の伝わる三陸町越喜来崎浜地区では、津波で20人近い人が犠牲になりました。

崎浜念佛剣舞は、その年に亡くなった人の家々を回り、舞を捧げます。多くの家が流されたため、震災の年は家々を回れませんでした。家族を亡くした人々が被災を免れた寺に位牌を持ち寄り、剣舞が披露されました。8月には、市外で暮らす学生も戻ってきて、「こんなとき



震災の年の夏、位牌を前に踊る(とりら第6号)

だからこそ」と、剣舞に参加してくれるといいます。故人を弔いたいという舞い手の思いが世代を超えて引き継がれ、地域の人々の心を結びつけています。

地域の復興とともに歩む

大船渡町平地域に伝わる平七福神は、昭和初期に大漁祈願の踊りとして始められたと

いわれるユーモラスな踊りです。平地域は津波の被害を受け、練習場所の漁業地域交流センターは全壊。保管していた道具類も全て失われてしまいました。

かに演じられ、住民待望の施設の落成を祝いました。「めでたい、めでたい」と始まる七福神が、はたしてこの時期にふさわしいだろうか。保存会の新沼勇さんは、迷いを抱きながら、出演を決心した、と当時を振り返ります。その心配をよそに、復活を遂げた七福神は、当日、多くの地域住民の喜びの声で迎えられました。



公民館の再建を祝福する平七福神(岩手日報平成24年11月4日付け朝刊)